

奈良時代の東西交流を示す土器

— 堂後遺跡出土

暗文土師器坏 —

上高津貝塚ふるさと歴史の広場は、国指定史跡上高津貝塚の保存と博物館活動に加えて、市内の埋蔵文化財調査を担当しています。現在、広場内の考古資料館で開催中のテーマ展「発掘された土浦の歴史」では、市内の発掘調査で出土した遺物を速報として展示しています。今回はその中から、奈良時代の東西交流を示す土器を紹介します。



縦穴建物跡

堂後遺跡は烏山三丁目に所在し、花室川右岸の台地上に立地しています。令和元年度に発掘調査が行われた際、縦穴建物跡1軒が発見されました。縦穴建物跡は、1辺8×8m程度の正方形を呈し、関東ローム層の上面から30〜40cm程度掘り込まれています。床は平坦でよく踏み固められており、大きな柱穴が4か所見つかっています。建物の北壁中央には砂混じり粘土で構築されたカマドがあり、その東側には貯蔵穴がありました。北壁を除く3辺の壁際には、幅10cm程度の溝が巡っています。建物の構造と出土した土器などから、奈良時代の住居跡と考えられます。

この建物跡から出土したのが、今回紹介する、暗文の施された土師器坏です。土師器とは、野焼きで作られた土器のことで、坏とはお椀のようなものです。暗文とは、焼成前の特定のタイミングで器表面を強くこすり、光沢を出すミガキという手法によって描かれた文様のことです。この土師器坏では、器の中央の見込み部に、ちょうど花丸を描くときのように、時計回りにぐるぐると暗文が施されています。また、口縁部から体部にも、放射状の模様を描かれています。

この文様構成は、当時の都であった平城宮で出土するものと極めてよく似ています。土師器坏の胎土(土器を構成する粘土と混和物)や、外面の加工が粗いことなどから、搬入品ではなく在地での模倣品と考えられます。この土器を作った、ある



暗文土師器坏

いは作らせた人物が、平城宮で使われた土器を知っていたことは確かでしょう。

堂後遺跡からは他にも、ふいごの羽口や、釘や刀子(ナイフ)などの鉄製品も出土しています。古代東海道駅路推定地に近い堂後遺跡は、近隣の遺跡とともに奈良時代における拠点的な集落の一部を構成していると考えられます。そこには、当時の都から役人が派遣され、暮らしていたのかもれません。

今回紹介した資料は、5月30日(日)まで展示しています。ぜひご覧ください。

岡上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(0826・7111)